

第45回理事会開催

1986(昭和61)年度の決算報告の承認など

去る6月17日(水)、当財団の第45回理事会が都内に開催された。まず、昨年度の決算報告書と活動概要に基づき報告が行われ、原案どおり承認された。これにより、事務局では現在、年次報告書の作成に着手している。

また、フォーラム助成や民間助成活動促進プログラムの助成対象の決定、選考委員(研究助成、第5回研究コンクール)の選任、及びその他の助成、成果発表助成対象、国際助成専門委員に関する報告が行われた。この5月に締切った研究助成と活動記録助成の申請状況についても報告された。

なお今回は、林雄二郎氏の専務理事退任に伴い、新専務理事の選任も行われ、浅田孝理事が7月1日より就任した。

第12回評議員会も開催

上記の理事会に引き続き、第12回評議員会がもたれた。ここでは、昨年度の事業内容についての報告とともに、本年度の事業計画についても報告が行われた。

▼理事会・評議員会



1987年度研究助成・活動記録助成 申請実績と助成予定

件数	申請実績	個人奨励研究 (第I種)	予備的研究 (第II種)	総合研究 (第III種)	研究助成・計	活動記録助成
		助成予定	助成予定	助成予定		
金額 (万円)	申請実績	56,871	119,951	32,982	209,804	10,505
	助成予定	4,000	6,000	10,000	20,000	2,000

おもな内容

- ◆専務理事退任にあたって……………2
- ◆専務理事就任にあたって……………3
- ◆日本型フィランソピーを考える……………4
- ◆変容する中国社会に触れて……………5
- ◆日タイ修好100周年記念・シンポジウム等……………6
- ◆刊行され始めた活動記録助成の成果、他……………7
- ◆最近の報告書から、他……………8

研究助成などに約800件の応募

研究助成および活動記録助成の一般公募については、本年4月1日より開始していたが、5月31日付けをもって締切った。

応募状況と本年度の助成予定は下表のとおりであるが、応募総数にして、研究助成は昨年度より若干下回り、活動記録助成は、逆に上回る結果となった。個人奨励研究は約12倍、予備的研究は約16倍、総合研究は約2倍、そして活動記録助成は約6倍の倍率となっている。

選考は、この7月から9月にかけて行われ、10月初旬には助成対象が決定される予定である。

経過報告会を開催

去る5月、昨年度の研究助成(主に個人奨励研究と予備的研究)および活動記録助成対象についての経過報告会を国際文化会館(東京・六本木)にて下記の日程により実施した。

出席者相互間の活発な情報交流も見られ、内容の濃い報告会となった。

- ・研究助成：5月8・9・12日
- ・活動記録助成：5月15日



基本は思いやりと豊かな感受性

—— 専務理事を退くにあって ——

トヨタ財団理事 林 雄二郎

◆少しも変わっていない日本人のおごり

ジャカルタの国立古文書館で、館が収集した戦時中の日本のニュース映画の一部を見せていただいた。東条首相のジャワ訪問のシーンがでてきた。ガンビル広場での大歓迎会でスカルノが熱弁をふるう。ところが、その後で東条さんの挨拶があったのだが、開口一番、「ただ今の代表者の言葉にもあったように……」と言ったのにはびっくりした。当時のスカルノと言えば、インドネシア人にとっては文字通り太陽のような存在である。それを“代表者”とだけで片づけて名前も言わない。何という無神経な非礼な言葉であろうか。あの時、あれがどのように通訳されたのかは知らないが、全く愕然としてしまった。

だが、考えてみると、無神経は東条さんばかりではない。かく言う私自身だって、自分では気がつかなくても、もっと無神経なことをたくさんやっていたのではなかったか。戦時中3年もいたバンドンに行き、まさに“なつかしの”バンドン工業大学を訪ねたのだが、驚いたことに誰一人として、かつてここに日本人がいたのだということを知らない。むろん、戦後40年以上も経っているのだから、当時いた若い連中も一人残らずタイアしてしまっているのだろうということはあるが、それにしても、誰か言い伝えていてもよさそうだと思って、いろいろ聞いてみても無駄であった。日本の存在は美事なまでのノープレゼンスである。この徹底したノープレゼンスには、何か理由がある筈だと思って、一生懸命反省してみた結果、思いついたことは、これは要するに、かつての日本の存在は、彼等にとっては早く忘れてしまいたい存在だということではなかったのだろうか。

「ジャワではたいした戦闘もなかったし、物資も比較的豊かで、日本人は悪いことをしなかったから対日感情は良い筈だ」といったようなことをよく聞く。現に私もそう思っていたものだ。だが、これは余りにも無神経なことであったのではないか。悪いことをしなかった。善政を敷いた。一生懸命に彼等を教育した。何事も苦楽を

共にした。こうしたことが、すべてその通りであったにしても、そして、だから、確かに彼等は別に日本人を憎んだり、恨んだりしていないかも知れないとしても、それでも、この招かれざる客である日本人のことは出来ることならソッと記憶の奥の方にしまい込んでしまって、なるべく思い出したくないものだ、という気持ちになることは十分に考えられる。これが結局誰も言い伝えなかった、そして今日の美事なノープレゼンスになった理由なのだろうと思いついた。



これは私にとって深刻な反省であった。確かに日本人の無神経なおごりの気持は戦時中から今日まで少しも変わってはいないようである。ついこの間のフィリピンの若王子さんの事件の時の対応の経緯を見てもそれがはっきり出ている。デビッド・ハルバースタムのベストセラーのタイトルではないが“覇者の驕り”が現代の日本人にないであろうか。

◆忘れてはならないフィランソロピーの基本

思いやり、他人の気持を理解しようとする心、豊かな感受性、そうしたことはフィランソロピーという行為をする場合に、どんな場合でもなくてはならない基本でなければならない。そんなことは、フィランソロピーに携わる人間にとって、イロハのイであるのに、どうもそれがわかっていないようだ、と、神が天にいてそう思われたのだろう。それで、トヨタ財団専務理事の職を退く直前に、わざわざインドネシアのバンドンまで訪ねさせて即物的に自覚をさせたのであろう。私にはそう思われたのである。私は、この神の啓示を静かに受けるつもりである。そして、それを退任に当たって、ひとこと言い残し、言い伝えておこうと思う。それがせめてもの私の罪滅ぼしになろうかとも思うからである。

最後にもう一度、大きな声で言っておきたい。

- ・ 思いやり
- ・ 他人の気持を理解しようとする心
- ・ 豊かな感受性

そのすべてはフィランソロピーの基本である。このことを断じて忘れてはいけない。



これまで以上に必要な自覚と自律

—— 専務理事就任にあたって ——

トヨタ財団専務理事 浅田 孝

※はじめに

このたび、トヨタ財団創立以来、長年にわたって専務理事を勤めてこられた林雄二郎氏の退任に伴い、去る6月17日の第45回理事会において、はからずもその後任としてご指名を受け、まことに身の引き締る思いでお引き受けいたしました次第である。

思えば昭和49年10月、豊田英二理事長をはじめとする関係者のご発意により、多目的助成財団を目指して発足して以来、選考委員会や理事会の末席に連なり、更に企画委員会（委員長：林雄二郎，他3理事）の一員として、財団の運営についての相談にあずかってきた。幸い、林氏には当分の間、引き続き理事・企画委員として参画いただけることになっているので、財団の歩んできた道をこれまで通り着実に進めてゆく体制にあることも、併せて報告しておきたい。

※トヨタ財団の基礎を築いた林氏

既にご承知の通り、林氏は専務理事としての単なる役職上の枠組みを越えて、その豊かな識見と進取の気性をもって、この13年間の間わが財団の創世期をリードし、確かな基礎を築いてこられた。

なかでも、財団創立10周年を記念して、わが国の主な助成財団の方々とともに、欧米諸国や東南アジア諸国の財団を代表するの方々をお招きして行われた国際シンポジウム「これからの民間助成財団」の開催や、かねてからの懸案であった「助成財団資料センター」の活動を軌道に乗せるなど、わが国における助成財団の多くが結集して進むべき道への布石をされたことは、私どもの記憶に新しいところである。

国内の助成については、本来の研究助成にも年々の改善を加えたほか、プログラムスタッフ達の懸命な努力により、“身近な環境をみつめよう”研究コンクールや活動記録助成が、より広い市民的な角度からの学習・創造の気運を全国的に喚起しつつある。

一方、国際面の助成では、これまでとかく疎遠であっ

た東南アジア各国とわが国との間の、さらに東南アジア諸国相互間の“隣人をよく知ろう”プログラム翻訳出版促進助成を発足させ、今では関係諸国の有識者に好感をもってしっかりと受け止められている。未開拓の早い時期から新領域を開拓した、岩本一恵氏（元プログラムオフィサー）との絶妙なチームワークの成果と言えるだろう。



※忘れることの出来ない選考委員の力添え

しかし、以上に述べた全てを通じて、当財団がこれまで着実に歩むことが出来た基礎には、様々な分野で今日の日本の指導的立場にある諸先生方に、選考委員会の委員長や委員としてご参加いただき、専門的な領域を越えた識見に基づいて、適切な審査やアドバイスをお願い出来たことにあるのは言うまでもない。

私自身もいくつかの選考委員会に参加して、それがどれほど精神的・肉体的苦痛を伴うものであるかを嫌というほど体験してきた。これらの先生方の真摯なお力添えを得てはじめて、今日のトヨタ財団の地歩が着実に築かれてきたのだということを忘れることは出来ない。厳しければ厳しいほど、選考委員会の努力と助成事業の成果は尊く輝いてくる、ということをお願い知らされている。財団の成果とは、申請者・選考委員・助成を行う側の三位一体の作品であると痛感するのである。

※従来を次代に

これからの日本をめぐる内外の諸情勢は、激しい変化の時代に入ろうとしている。いままで以上に財団自身が自らを厳しく戒めつつ、この変化する世界情勢のなかに、確かな助成事業の実績を積重ねていくことは容易な事ではない。責任の重大さに身も引き締る思いである。当面は、研究助成や国際助成をはじめとする、これまでの成果をもとに、次の時代へ向けてしっかりと繋いでいくことこそが、私の責務であると考えている。

以上、まだ落ち着かぬままに、とりあえず就任にあたっての感慨を申し述べさせていただいた。今後とも何卒よろしくご指導・ご鞭撻の程お願い申し上げます。



日本型フィランソロピーを考える ——出版された研究会の成果——

フィランソロピー研究会代表 川添 登

このたび、大正期の企業家の社会文化事業に関する一冊の書物を出版することが出来た(注1)。大正期に社会文化事業を始めた7人の企業家(注2)の思想と事業を分析・紹介し、併せて日本の篤志的風土の特徴を示す関連状況についても論じたものだ。フィランソロピーというわが国ではあまり馴染みのない外来語を冠した研究会を初めてもう5年近くになるが、この本はその研究会のささやかな成果である。

【研究会のこと】

フィランソロピーという言葉は、phil ein(to love)とanthrōpos(mankind)とを合成したギリシャ語に由来するという。もともとは、博愛とか慈善とか篤志という意味だが、欧米では一般に、個人や企業の寄附によって行われる事業(活動)のことを言う。敢えて訳せば、「篤志事業(活動)」となるが、この日本語のイメージよりもっと現代社会の中に位置づけられた組織的な事業(活動)を意味しており、民間助成財団の活動などがその典型的なものと考えられている。

私たちのこの研究会は、このような意味でのフィランソロピーに対する意識が現在の日本には余りに乏しいのではないかと林雄二郎氏(トヨタ財団元専務理事)の嘆きから始まった。日本は様々な分野で世界に大きな影響力をもっているのに、ことフィランソロピーに関しては、その活動内容も社会の認識も余りに貧弱すぎるというわけだ。そんな不満を語り合う中から、ともかくフィランソロピーについて自由に議論する場を作り、話合う仲間をつくらうではないかという提案が出て、1982年の7月から研究会を始めることになった。

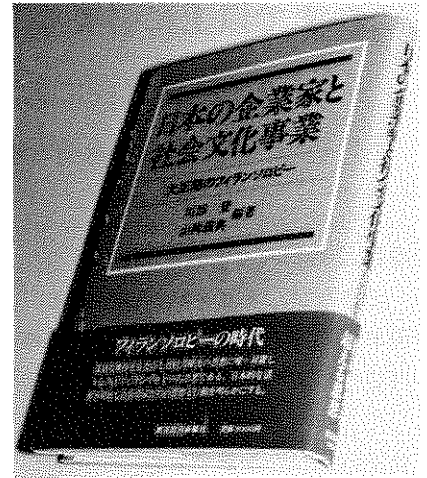
【学習と模索の2年】

議論の場を、とは言っても何をどう議論するのかさえ検討がつかない。この分野の専門家らしき人も、拠り所となるような書物も、ほとんどみつからないからだ。そこで、最初の2年間はおっぴろげな文化・文明におけるフィランソロピーの考え方について歴史や思想の専門家から話を聞くことにした。そして、時々ケース・スタディとして財団活動に携わるスタッフからの事例報告を聞いて問題点を話し合った。

そのような議論の中から、次第に一つのテーマが浮かび上がってきた。「日本の社会や文化に根ざしたフィランソロピーとはどういうものか?」という問である。これからのフィランソロピーは、世界に通用するものでなくてはならないことは言うまでもないが、同時にやはりそれぞれの社会や文化に根ざしたものでないと発展性はない。そこで、テーマをそこに絞って1984年の7月から第2次研究会をスタートさせた。

【大正期をテーマに】

それまでの議論を通して、日本の近代的なフィランソロピーの源流は大正時代あるいはその前後にあるのではないかと考えられていたから、その時期に絞って代表的な企業家の社会文化事業をとりあげ、具体的な検討を試みることにしたのである。新たに募ったメンバーも含めて分担して事例調査を行い、研究会で報告し、皆で活発に意見を述べ合う。メンバーの多くは専門の研究者というよりも、何らかのフィランソロピー活動に携わっている実務家であるから、議論の多くはそれぞれの体験に基づくもので、大変具体的なものが多かった。



今回の出版は、この報告と議論を基に各自が改めて調査し、書下し、一書にまとめたものであるが、9人の執筆者はこのテーマに関する限り全員が素人と言ってよく、しかもそれぞれに別に本務をもっているもので、原稿が揃うまでにはなかなか骨が折れた。ともかく、世に出ることになりひと安心と言ったところである。

【これからの研究会】

本をまとめるために、研究会自体は1年以上も休むことになってしまった。そろそろ次のシリーズを始めたいと検討中である。テーマは、「現代の企業フィランソロピー」を予定している。大正期の事例研究を踏まえて、現代の企業が行っている社会文化事業についての本質的な議論が出来ないかと考えているが、果たしてどのようなものになるか。

このテーマにご関心があり、研究会に参加を希望される方は、財団の事務局を通してお申し出いただきたい。

(注1) 『日本の企業家と社会文化事業——大正期のフィランソロピー』
川添 登、山岡義典・編著、東洋経済新報社・刊、A5判 244頁、3,000円

(注2) 森村市左衛門、原田二郎、齋藤善右衛門、安田善次郎、大原孫三郎、森本厚吉、淡沢敬三の7人



変容する中国社会に触れて —国際共同研究の一例—

研究助成部門 山岡義典

◎増えてきた中国との共同研究

中国との共同研究が可能になってまだ日が浅い。しかし、その要望は急速に高まっている。そのことは、ここ数年の研究助成への申請数の増加を見てもよくわかる。その結果、日中共同研究で助成対象となるものも年々少しずつ増えてきた。

今後のためにも研究の実情を知る必要を感じ、この5月に一つの研究現場を見学することにした。訪ねたのは内蒙古自治区。一昨年の秋から3年間の予定で進められている「中国の乾燥地における沙漠化の機構解明と動態解析—毛烏素沙漠緑化と農業開発に関する基礎的研究—」

(中国では砂漠でなく沙漠と書く)である。研究代表者は鳥取大学砂丘利用研究施設の松田昭美教授。8つの大学の18名の研究者が中国の治沙研究中心のメンバーと共同して研究する。

◎「毛烏素治沙研究中心」

5月16日の朝、4名の共同研究者に同行して大阪空港から北京に向かう。北京空港には中国側共同者の廖茂彩氏と姚洪林氏がわざわざ内蒙古から、それに『日本の財団』(林・山岡著、中公新書)の中国語訳をされた田桓氏が出版されたばかりの訳書を携えて出迎えに。午後は北京市内を見物し、夜の飛行機で内蒙古の首都、呼和浩特へ。3泊して林業科学研

究院を訪問してその樹木園を見学したり、周囲の農地や水利の状況などを見てまわる。そして4日目に3台の車を連ねて目的地の「毛烏素治沙研究中心」に。約8時間の印象深い眺めの道程であった。

この「研究中心」は、沙漠化の防止と乾燥地農業の開発を目指して1983年に設置された。その試験研究用地は8000ヘクタールに及ぶ。春から秋にかけて30人余りの研究者が寝食を共にして調査・研究に従事する。

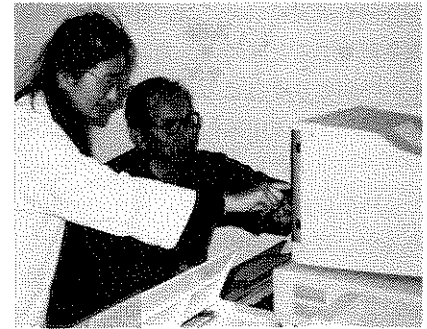
毛烏素沙漠は、「沙漠」とはいても砂丘と草原がモザイク状に分布している地域で、生態的に微妙なバランスを保っている。地下水が豊富で、方法次第では農業も可能だ。しかし、バランスを失うと沙漠化する。長いあいだ遊牧民が移動しながら羊を飼っていたが、1950年代以降の定住・農地化政策によって急速に沙漠化が進展してしまった。人民公社でうまく農地を維持管理できず、荒れた畑地が広がったためという。

そこで、1983年から新しい制度が導入された。牧民に一戸当たり2～300ヘクタールの土地を与えて自主的に牧畜や農業をできるようにし、努力次第で個人の収入を増やせるようにしたのだ。牧民たちの意欲と努力によって沙地を緑化し、草地や農地として整備・管理し、生産をあげるとともに、地域全体の保全を図ろうとしたのである。その牧民たちの必要とするノウハウを開発し、それを指導するのがこの「研究中心」の具体的な目的とあってよい。

◎共同研究の現場で

この目的はすでに着々と実現しつつあるようであった。移動性の砂丘を固定するための緑化の工夫。地下水汲みあげによる灌漑農業のさまざまな試み。ぶどうなどの果樹の実験的な栽培。これらの実践に基づくモデル農家の指導。

これらは在来の知恵と技術を生かしたものであるが、このような方法をキチンと続けていきさえすれば、とりあえずは



▲パソコンで気象データベースの作業

沙漠化を防止し農業生産をあげることも可能であろう。

しかし広域的で長期的な、しかもより生産性の高い生態系の維持管理を実現するには、様々な基礎的データの積重ねや科学的な分析・評価が必要になる。日本チームとの共同研究の目的は、それを実現することにあつたといつてよかろう。

1年間の予備研究(p.8参照)を通じて相互の交流が計られ、具体的な研究計画が検討され、多くの研究機材が運び込まれた。様々な気象観測機器、ランドクルーザーやコンピューター、それに化学的な分析・実験器具。新たに買ったものの他にも、それぞれの研究者が中古の機材を持寄った。また、できるだけ現地で手作りにする工夫も行われた。そして日本の研究者が順次2～3か月ずつ滞在し、中国側の若い研究者とともに観測や実験を進めるのである。

今回私は、この「研究中心」に4泊ほど滞りながら様々な場面を見学したが、ともに作業をしている中国側研究者の表情は実に真剣であった。

◎研究交流と援助

このプロジェクトの特徴は、研究交流という性格とともに、援助という性格ももっていることだろう。研究・交流・援助が一体になっているわけだ。共同の作業をとおして共同の研究成果を生みだすこと、すなわちクリエイティブな活動を行うことが重要なことは言うまでもないが、同時に共同研究を通してどのような人間関係を築き、現地に何を残すことができるのか、非常に重要であろう。(ア)

▶砂丘の移動量を観測





(N)今回の研究については、日中共同の成果を期待すると同時に、共同研究終了後も、今回とりそろえられた研究機材が有効に活用されて中国側の独自の研究成果が次々に生まれ出ること期待したい。

このたび訪問したのは、ほんの一例であるが、日中共同研究について数々のことを考えさせられた。また、帰途、北京と上海で多くの人々に会い、中国の社会がいま激しく変化しつつあることを実感した。このような変化の中で、多くの研究課題が発生していることも事実である。民間の財団としてできることは限られているが、民間にふさわしい人間味のある活動が促進されればと思う。

日タイ修好100周年を記念して、今秋ワークショップ・シンポジウムを開催

当財団は、研究助成や国際助成などを通じて、東南アジアの研究者による東南アジアの固有文化の研究、東南アジアの研究者による日本研究、また東南アジアと日本の研究者の共同研究、さらには、「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成による東南アジアと日本の相互理解を目途とした本の翻訳等、多面的、広範な学術・文化分野で東南アジア諸国との協力活動を行ってきた。

これら従来の助成活動の実績を踏まえて、本年9月に日本とタイの両国が修好宣言に調印して100周年を迎えるのを記念して、『日タイ交渉史に関する史料について』と題する研究ワークショップと、『タイ美術史——寺院壁画と石造建築を中心として』と題する公開シンポジウムを開催することとなった。

このワークショップおよびシンポジウムは、東南アジアとの文化交流に長年の実績をもつ、財団法人国際文化会館との共催で、9月4日(金)と5日(土)に同会館講堂(東京都港区六本木)にて行う。

①研究ワークショップ〔9月4日(金)〕

本ワークショップは、研究助成による日本語およびタイ語一次史料に基づく日・タイ交渉史の予備的基礎研究(代表:吉川利治・大阪外大教授)の遂行と関連して、日タイ双方のこの分野の研究者がこれまでに行ってきた、日タイ交渉史関連の史料に関する研究成果を持寄り、互いに情報を交換して今後の同分野の研究を一層促進させることを目的としている。

プログラム概要

- 【第1部】 琉球史料を中心に
- ・報告 日タイ交渉史関連の琉球史料
(仮題、以下同様)
小葉田淳(京大名誉教授)
 - ・コメント
チャーンウィット・カセーシリ
(タマサート大副学長)
- 【第2部】 オランダ史料を中心に
- ・報告1 日タイ交渉史関連のオランダ史料
岩生成一(東大名誉教授)
 - ・報告2 同上
ティラワット・ナ・ポーンベット
(チュラロンコン大助教授)
- 【第3部】 史料館史料を中心に
- ・報告1 日本の史料館史料について
吉川利治(大阪外大教授)
 - ・報告2 タイの史料館史料について
テムスック・ヌマノンダ
(シンラパコン大準教授)

なお、このワークショップは、原則として非公開としている。

②公開シンポジウム〔9月5日(土)〕

本シンポジウムは、同時期に東京国立博物館で開催される予定の「タイ美術名宝展」(東京国立博物館、朝日新聞社、他主催)に協賛して開催するものである。

ここでは、国際助成によるタイ北部寺院壁画の研究(代表:ソン・シマトラン・シンラパコン大助教授)と、同じく東南アジア伝統建築の歴史——6世紀から

13世紀のタイにおける建築の発展(代表:アヌウィット・チャレンスブクン・シンラパコン大準教授)の成果を基に、タイ美術史のうち特に壁画と建築に焦点を当てながら、タイ美術史学の権威であるスパトラディット・ディッサクン元シンラパコン大学々長を招いてタイ美術史全般の紹介を行うことを狙いとしている。また、東南アジア美術史におけるタイ美術研究という視野の下で、タイと日本両国の研究者が意見を交換することによって、新たな研究の展開の契機となることも期待している。

プログラム概要

- 【第1部】 タイ美術史の概観
- ・講演/報告1 タイ美術史の概観
スパトラディット・ディッサクン
(シンラパコン大元学長)
 - ・コメント 東南アジア史におけるタイ美術の視点から
山本達郎(東大名誉教授)
- 【第2部】 タイの寺院壁画
- ・講演/報告2 タイの寺院壁画
ソン・シマトラン
(シンラパコン大助教授)
 - ・コメント ビルマの寺院壁画との比較の視点から
大野 徹(大阪外大教授)
- 【第3部】 タイの石造建築
- ・講演/報告3 タイ建築史—石造建築を中心
アヌウィット・チャレンスブクン
(シンラパコン大準教授)
 - ・コメント クメールの石造建築との比較の視点から
石澤良昭(上智大教授)

このシンポジウムは一般公開(入場無料)で行われるが、詳細などの問い合わせについては、国際文化会館(☎ 03-470-3211 担当・田南)までご連絡いただきたい。

(国際助成部門・牧田記)



刊行され始めた『活動記録助成』の成果

●独立した「活動記録助成」プログラム
現代社会が抱えている諸問題を解決するためには、冷静な観察にもとづく地道な研究が重要なことは言うまでもないが、同時に市民感覚に根差した果敢な実践活動も欠くことは出来ないだろう。すでに日本の各地では、このような個性豊かな活動が盛んになりつつあるようである。当財団では、こうした活動が、将来社会の“芽”となることを期待し、昭和59年度から『新しい人間社会を目指した市民活動の記録づくり』に助成を開始したわけである。

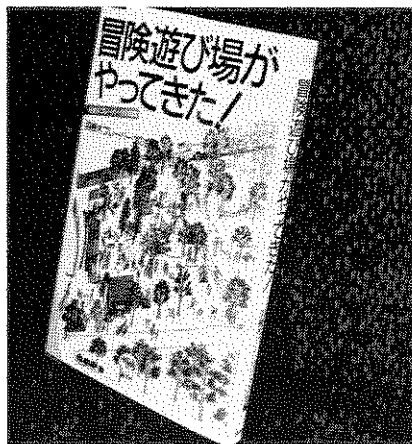
当初の2年間は、研究助成プログラムの一環（特定課題）として試行的に助成を行ってきたが、昭和61年度からは独立したプログラム（「活動記録助成」）として、記録の作成と併せてその出版にも助成を開始した。昭和59年度以来、すでに33のグループが助成を受け、記録の作成に取り組んでいる。

●出版された2冊の記録

その中から、最近、二つの記録が出版の運びとなった。以下に紹介しよう。

①“冒険遊び場がやってきた！”（A5判200頁、羽根木プレーパークの会編、晶文社刊、1,600円）

東京世田谷にある羽根木プレーパークは、その地域の父親や母親たちの努力で



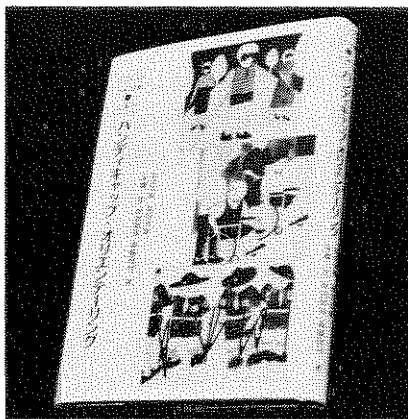
生まれ、維持されている大変ユニークな遊び場である。

本書は、その実現の前史、誕生の経緯、運営の実情や苦勞、子どもたちの反応などを克明にまとめ、冒険遊び場づくりの楽しさ・苦しさ・ノウハウを豊富な写真やイラストを混えて軽妙なタッチで綴っている。

②“ハンディキャップ・オリエンテーリング”（A5判240頁、安藤忠・原田昭智・森脇賢司・他著、松籟社刊、1,800円）

健全者が身体障害者の行動を身をもって体験するこのオリエンテーリングは、細心の準備や工夫、アイデアを必要とする活動である。

本書は、北九州市における7年間にわたる試行錯誤の活動実績をわかりやすく紹介しており、新たに同じような活動を始めようとする人々のマニュアルとして役立つであろう。



さらに今後は、これに続くものとして、「精神障害者の社会復帰を目指す15年間の地域活動の記録」、「1年間ボランティア事業の記録」、「目と耳の不自由な青年の大学生活を支えた人々の記録」が、刊行されることになっている。

当財団では、こうした記録が“草の根”グループ相互の共有の財産となることにより、各々の活動がより一層発展・展開していくことを願っている。（渡辺記）

新刊紹介……………

『マン・ウォッチングする都会の鳥たち』
唐沢孝一・著
草思社・刊
四六判、270頁、1,600円

唐沢孝一氏を代表とする都市鳥研究会は、第3回“身近な環境をみつめよう”研究コンクールで3年にわたる精力的な観察調査を行い、この3月に研究奨励特別賞を受賞した。

本書は、その成果をもとに唐沢氏が個人の立場で書き下したものである。大都市・東京への野鳥の進出の姿を暖かくみつめ、鳥と鳥の関係、鳥と人の関係を鋭い洞察力で描き出している。特に、標題にも示されているように、「人を見つめながら生きる鳥」という視点がユニークである。地図や写真やスケッチも豊富で大変わかりやすく、新しい視点の都市論、東京論としても興味深い。

『日本的基金会——資助団体的源流和展望』
林雄二郎・山岡義典・著、田桓・訳
社会科学文献出版社（中国）・刊
A5判、198頁 2.5元

中国では財団のことを基金会と言うが、最近では経済体制の改革に伴い、新たに基金会設立の気運が高まっている。本書は、そのような動向に鑑み、『日本の財団——その系譜と展望』（中公新書）を中国語訳で出版したものである。訳者の田桓氏は、中国社会科学院世界歴史研究所の日本近・現代史研究者。

日本と中国では社会体制が違うため、助成財団のもつ意味や役割も大きく異なるであろう。従って、日本の例がそのまま参考になるとも考えられないが、本書を通じて日本社会の一端が理解されれば有意義なことと思われる。この翻訳・出版に対しては、当財団より助成が行われた。

**最近の報告書から**

当財団の助成研究から、「成果発表助成」によって印刷された報告書を紹介します。入手ご希望の方は、送料分の切手を同封の上、財団レポート係宛てお申込み下さい。(品切れの際はご容赦の程を)

005 中国の乾燥地における沙漠化の機構解明と動態解析(予備調査)——特に毛烏素沙漠において——(内蒙古沙漠開発研究会, B5 97頁 和文, 送料250円)
中国内蒙古自治区の毛烏素沙漠は400万haの面積を有しているが、1950年代に入り荒廃が急速に進み年間約10万haの割合で沙漠化が進んでいると言われる。この沙漠化を防止し、農牧地として有効活用を図るための施策が1983年から始まり、85年から日中の専門家の交流が始まった。本書は、それから86年10月に至るまでの予備調査の結果をまとめたもので、リモートセンシング技術の応用や自然環境データベース・システムの開発に関する検討、現地調査に基づく気象、灌漑、砂防・緑化、農業機械、の立場からの提言が主な内容である。

I-017 住民によるまちづくりシステムを求めて——歴史的街区における都市計画道路のあり方と住民による町並協定推進に関する研究——(木原勝彬・他 A4 108頁 和文, 送料 250円)

市街地内の道路が拡幅されると、沿道の都市景観は一変する。奈良市元興寺界限(奈良町)のように伝統的な町並が残っているところでは、特にその変化は著しいものとなり、都市景観の大きな混乱も予想される。本書は、そのような懸念に対して何とか秩序ある町並の創出を図りたいと願った市民グループが、調査し提案し、実践したことの記録である。全体は、まちから学ぶもの、まちにとけこんだみち、まちなみをつくるひとびと、まちづくりシステム、の4部から構成されている。住民活動から(社)奈良まちづくりセンターの設立に至る期間の研究活動の記録としても興味深い。

“皆さん、ありがとうございました”

前略、善き理事と同僚に生まれ、日本や東南アジア在住のホンモノの学者のご協力をいただくという幸運を得て、この12年間トヨタ財団の仕事をしてきました。皆様に心からお礼を申し上げます。

「トヨタ財団で仕事をしてきた」と書かずに、「トヨタ財団の」としたのは、私は既に2年前に退職をしているからです。理由は、新しい仕事を始める準備をするため、です。なお、この間、財団の国際部門プログラム・コンサルタントとして、新しい国際プログラムの案づくりの仕事をさせていただきました。提案した案の幾つかが、理事とスタッフのご努力で既に実現しつつありますが、こんな嬉しいことはありません。

財団の創業期に仕事をさせていただいたことは、苦勞もありましたが、大変な幸運でした。何故なら、失敗も含めていろいろな経験ができたからです。初めは、スタッフ私一人という国際部門でしたが、企画委員の先生方はそれを暖かく、寛容なお心で育てて下さいましたし、日本人のホンモノの東南アジア学者も力強い応援と心のこもった助言と冷静な選考眼を提供して下さいました。一方、東南アジアのホンモノの学者とは、非常に強い心のつながりを築くことができ、大変大切にしておきたい経験を共有しています。

もちろん道は平坦だったわけではなく、初めのうちは日本人ということで、東南アジアの人々に批判され、つるしあげを食いました。そんな状況の中から、「隣人をよく知ろう」などの助成プログラム案を共に作り上げ、それを日本と東南アジアで実現させるということができたのも、東南アジアの人々と良いパートナー

シップが組めたからであり、また、財団内のチームワークに支えられたからです。有りがたいことです。

1977年に初めて東南アジアの地を踏みましたので、今まで10年間、彼地の人々とその環境に付き合ってきました。そして、こちらも文化的に影響を受けました。『ゆったりと流れる』というのがそれです。私にとっての次の一步は、ここから生まれてくるような感じがしています。ところで、助成財団の仕事、特にそれを支えるスタッフの仕事はとても地味なもので、「縁の下の力持ち」的存在です。

そこで、わが親愛なる同僚に一言。

第2期に入ったトヨタ財団は、社会的変化も含めて創業期とは異なった状況に置かれています。しかし、人間は自分の環境も含め、そのイメージするところのものを創る、という宇宙の大法則がありますので、「こうありたい財団」というイメージを常に心に描きながら仕事をしていくことが大切だと思います。そのポジティブなイメージの実現を祈ります。

かしこ

1987年6月30日

岩本一恵

編集後記

◆申請用紙の請求数から、応募が昨年よりかなり増えるものと予想された研究助成の公募でしたが、いざ蓋を開けてみるとむしろ若干減っていました。(ホッ!)
◆とは言っても、相も変わらぬ高倍率。申請された方も必死でしょうが、選考委員や事務局の側にしてもこれからの精神的苦痛を伴う暑い夏がやって来るのダ!!
◆「トヨタ財団丸」の船長が代りました。今後は、真正面から来る大波以上に、突発的に起こる横波をいかに乗切るかということが新船長の課題のようです。でも、羅針盤の指す方向には変わりありません。

トヨタ財団レポート No.41

このレポートを継続してご希望の方は、お葉書にて財団宛てお申し込みください。

発行日 1987年7月15日

発行所 財団法人 トヨタ財団

発行人 山口日出夫

編集人 渡辺 元

印刷 真友工芸株式会社